

OB紹介



広島県教育委員会 事務局管理部
教職員課 職員給与室
員 耕司さん
(平成9年度学部入学)

「お仕事について教えてください。」

私は広島県の教育行政職員として採用されたので、入庁して以来教育委員会関係の部署を回っています。現在は教育委員会事務局の管理部教職員課職員給与室に所属しています。職員給与室は、県内の公立学校の教職員や教育委員会事務局の職員など二万人を超える人達の給与に関する仕事をしており、具体的に言えば、月々の給与や賞与の支払い、給与額の決定、昇給についてなどです。広島県の職

員の給与に関する事項は全て県の条例や規則などに定められているため、それらに沿って職員に正しい給与を支払っていく必要があります。

また一年前までは、東広島市高屋町にある中高一貫の県立広島高等学校・広島中学校の事務室で働いており、生徒数が多い大規模校だったので、毎朝かかってくる生徒の欠席や遅刻の電話対応で今日も慌ただしい一日が始まるという感じでした。学校では、授業で必要な物品の購入や外部委託業務の契約、校内予算の管理などを担当していました。

他にも生徒数が十数人しかいない本当に小規模な夜間定時制高校も印象深いですし、教育事務所という地方機関で市や町の教育委員会の人達と一緒に仕事をしたりと、数年ごとにある人事異動のたびにいろいろな経験をしてきたと思っています。

「その仕事を選んだ理由を教えてください。」

行政職公務員を選んだのは、大学時代に地球温暖化問題に興味を持って勉強し

ていたことが関係していたと思います。この問題に対して担う行政の役割は大きいと思っていましたし、例えば民間企業や研究機関が技術を磨いて温室効果ガスの排出が少ない製品を作り上げることで問題解決にアプローチできるように、行政の立場から地球温暖化対策を盛り込んだ企画・立案をしていくことで、問題解決にアプローチできるはずだと思ったのが目指すきっかけでした。

また、当時自分の周りの先輩達に市役所とか教員を含めて公務員として働いている人が多く、仕事の内容や職場の雰囲気についての話をよく聞いていたので、そこで働いている自分の姿をイメージしやすかったというのがあります。

「その仕事のやりがいや魅力を教えてください。」

この質問は結構難しいですね(笑)。今の私の職員給与室での仕事は、職員に対して一円のミスなく給与を支払うことが要求されており、それができていたり前という感じですから、常にそれを目指しています。こうした責任ある仕事

を任されているという自覚が、この仕事のやりがいにつながっているように思います。

しかし私の個人的な考えかもしれませんが、行政公務員という仕事は、やりがいをなかなか見つけにくい面もあるような気がします。というのも先程お話ししたように、私達は数年ごとに人事異動があり、その度に仕事の内容がガラッと変わってしまうことが多いんです。私は入庁して十年が経ちますが今の職場でもう六か所目、つまり二年に一回異動している計算になります。異動の度に新たに覚えることも多く、このような短いサイクルの中では、その時々業務をこなすのに一杯で、自分自身、仕事に追われているという印象が否めません。

でも、これも繰り返しているうちに段々と慣れつつあり、仕事の中のコツとどうか、行政事務の共通点みたいなものが最近ようやく分かってきたような気がします。どのような状況であっても、自分が仕事にコントロールされるのではなく、自分が仕事をコントロールできるようにしたい。そうやって初めて、私がこの仕事のやりがいや魅力を語れるよう

になるのではないかと思います。

「社会に出て学んだことを 教えてください。」

「学んだ」とは違うのですが、社会に出て気付いたことがあります。それは皮肉な話ですが、自分が大学時代にいかに甘えていたかということですね。時間割を自分で好きなように組めましたから、先輩や友達から聞いた楽に単位が取れる（という噂の）講義を優先したり、朝早く起きるのが嫌だから一コマ目の講義は一切取らなかつたりを平気でしていました。それにも関わらず寝坊し、二コマ目の講義でさえ遅刻してしまう始末。高校生のときは親や教師の目もあり、毎日登校して受験勉強に励んでいたのに、大学生になり一人暮らしを始めた途端に緊張感はどうも緩んでいきましたね。あの頃は今と比べて自由な時間は腐るほどあり、受験からも解放されて自分が本当に学びたいことを学んだり、将来自分の武器となるものを身に付けることができる時間だったのに、と悔やまれます。社会人になると自分の自由な時間を確保する

のが難しくなりますからね。

「学生時代の専攻科目を 教えてください。」

社会科学コースに所属しており、既に退官されましたが富井利安先生の下で、卒業論文は地球温暖化問題について書きました。あまり発展的な内容ではありませんでしたが、当時は京都議定書が採択され、国内でも地球温暖化対策推進法が制定されて間もなかったので、とてもタイムリーなテーマだったと思います。高校生のころから環境問題に興味を持っており、総科を選んだのも環境問題をやりたいという思いがあったからです。総科に入り、環境問題を勉強するにあたり、法律などの社会科学の方面からアプローチしたいと考えてこの専攻を選びました。

「大学生生活の思い出を 教えてください。」

大学生生活を通してサークル活動が楽しかったですね。高校までは剣道ばかりで

文化系のクラブに全く縁がなかったのですが、大学入学を機にギターを覚えて好きな曲の弾き語りがしたいと思い、ギターの練習ができるということでマンドリンクラブに入りました。その後、先輩から「お前は身体が大きいから(笑)」という理由でコントラバスにコンバートされたのですが、その頃はまだ楽譜にドレミ……と階名を書かなきゃ分からないレベルながらも、自分が楽器の音を出して先輩達との演奏に加われるという面白さに魅了されていき、クラブの活動日以外にも自主練習に励んでいました。基本的には年に二回の大きな演奏会に向けて活動していたのですが、サークル棟の一番奥まったところにある、ボックスと呼ばれる部室のようなたまり場の居心地が良く、用がなくても一人でブラリと行ってみたら、やっぱり同じような暇な誰かがいる……というのが面白くて。大学時代に一番長く時間を過ごした場所の一つです。

入学当初のオリキャンで仲良くなった総科の友人達とは、卒業までJ棟の掲示板の辺りでよく過ごしていました。みんな一人暮らしだったので頻繁にお互いの

家を行き来して、飯を食ったりお酒を飲んだり。結局一人が寂しかったんですよ(笑)。ふとしたきっかけでこのメンバーでバンドを組もうと盛り上がり、バンド経験皆無な連中で数ヶ月間練習し、ゆかた祭りで演奏して大恥をかいたのも今となつては愛おしい思い出です。今では全国に散らばってしまいました。時々連絡を取って会ったりしていますよ。

「総科生にメッセージをお願いします。」

総合科学部の「総合的」という言葉に囚われず、自分の核になる専門分野を早く見つけて欲しいですね。総科の学生の時間割というのは、その大部分が各自の裁量に委ねられているので、シラバスを見て面白そうだと思った講義を選ぶだけでも簡単に埋められますが、でもそれは単なる好きなものつまみ食いであり、本来目指すべき総合的な勉強とは違うような気がします。本当にやりたいことをまず決めることができれば、それをより様々な視点から考えることができない

か、だから補足的にこういう講義を取ったらどうだろうか、と発展させていく。偉そうなことを言いましたが、自分自身が実践できずに少し後悔しているの、これから勉強する皆さんへのメッセージとしたいと思います。社会人になったら興味を持ったものについてすら、なかなか勉強できませんからね。

【担当】 23年 大濱 高佳